

松山幸生先生講述

全32回--12

2022年7月

写者

小原靖夫

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

第12回 真実なる神の約束のもとに錨を降ろせ

第6章⑬節から⑳節 神の確かな約束

⑬神は、アブラハムに約束する際に、御自身より偉大な者にかけて誓えなかったのに、御自身にかけて誓い、

⑭「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を大いに増やす」と言われました。

⑮こうして、アブラハムは根気よく待って、約束のものを得たのです。

⑯そもそも人間は、自分より偉大な者にかけて誓うのであって、その誓いはあらゆる反対論にけりをつける保証となります。

⑰神は約束されたものを受け継ぐ人々に、御自分の計画が変わらないものであることを、いっそうはっきり示したいと考え、それを誓いによって保証なされたのです。

⑱それは、目指す希望を持ち続けようとして、世を逃れて来たわたしたちが、二つの不変の事柄によって力強く励まされるためです。

この事柄に関して、神が偽ることはありません。

⑲私たちが持っているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなものであり、また、至聖所の垂れ幕の内側に行くものなのです。

⑳イエスは、私たちのために先駆者としてそこへ入って行き、永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです。

さて、このヘブライ人への手紙というのは、繰り返しになりますが、背教の危機におかれたキリスト者たち、あるいは信仰を捨

ててしまうという棄教の状態の中に追い込まれているキリスト者たちに対して、

「キリストにしっかり結びついていなさい、キリストはそこでも憐れみ、あなたがたを救ってくださるのです」ということをしっかり宣べ伝えようとして書かれた手紙と言えます。

そこで今日の箇所は、ちょうど前の⑱節のところに

「あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人々を見倣う者となってほしいのです。」

とある勧めの言葉に対応していて「その信仰によって、また忍耐によって約束されたものを受け継ぐことを待ち望んでいた人々」そういう人々に、向かってこれから宣べ伝えていこうということなのです。ですからある意味では、一人一人の心の状態を非常に憂いながら、しかも彼らの切迫している現実の厳しさを踏まえて、その中でなおかつ神の恵み

は先行しているのだ、神の恵みはそれを貫いて救いに導いていてくださるのだ、ということを確認させたいという願いをもって書かれている箇所だと言えるでしょう。

第⑬節から⑮節、

「神は、アブラハムに約束する際に、御自身より偉大な者にかけて誓えなかったので、御自身にかけて誓い、『わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を大いに増やす』と言われました。こうして、アブラハムは根気よく待って、約束のものを得たのです。」

「神の約束の確かさについて」語ります。

神がアブラハムに対して約束をなさったということは、先ず私たちの信仰の先達、特にユダヤ人たちにとっては自分たちの先祖の中で、最も優れた先達と考えられているアブラハムと

いう人物の存在を彼らに示しながら、「アブラハムと神とのかかわり方をはっきりここでもう一度問題にしておきたい、そこからあなたがたは考えを進めていってほしい」ということで、著者は「神は、アブラハムに約束する際に」という言葉で語り始めます。

カルデアのウルにいたアブラムに「あなたは、故郷を離れ、親族を捨ててわたしの示す地に出てゆきなさい」という呼びかけを伴って、神は「あなたはわたしの前を歩むことによって全世界の祝福の基になりなさい。そのためにわたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を海辺の砂のように、大空の星の数のように多くするから」という約束をなさるのです。

具体的に神からアブラハムに与えられた約束というのは、「彼らを祝福する、即ち、大いなる国民にしてください」、「そのために「子孫を多く与えてください」、「という約束でした。

ところが現実には、アブラハムには子どもがなかった。神から召されてお言葉に従い25年間経ったけれども、やはり子どもがなかったという極めて絶望的な現状を自分の前に踏まえて、「神様、あなたの約束は有効なのですか」ということを問わずにはいられない現実の中で、彼はなお神の約束を待ち続けた。そしてやっと25年目にイサクという子どもが与えられた。これはもう人間的に考えたならば全く不可能な状況の中で、神はその御業を進められるという何よりも大きな証しとして、アブラハムはこのイサクを神からの特別な授かりもの（奇跡の子ども）として喜び感謝して育てた。

ところが、彼が一人前になるかならないうちに神はアブラハムに、「お前の息子のイサクをわたしの前に献げなさい」とおっしゃる。これはアブラハムにとっては極めて大きなショッキングな出来事だった。どうしたらいいのだろうか、神が約束の証しとして与えてくださったものをまた取り上げられてしまった場合、一体どうやってこれから先、神を信じていったらよいだろうという状況の中に彼は突き落とされるわけですが、その中でなお彼は神の御言葉に従い続け、イサクを神に献げるために、モリヤの山に向かって出かけて行った。そんな記事が出て来るのです。

そこで神は、アブラハムの信仰を義しとされて、イサクをお助けくださるわけですが、それからまた待つこと60年にしてやっと孫が、しかも双子の孫を授かることになるわけです。神は星の数ほどにお前の子孫を増やすよとおっしゃったけれども、たった一人の子どもをくださったり、二人の孫を与えてくださっただけということになるわけです。

そのことは、神を信じ必死になって歩み続けて80年を超える年月を経ても、自分は目の前に神の約束の成就が、どう考えてもはっきり見られない状況で終わってしまうと思われた。

「④節の神の約束は、彼の目から見たらば到底叶いそうもない御業だけれども、その約束が確かなものであることを証しするために、アブラハムに対して、「御自身より偉大な者にかけて誓えなかったので、御自身にかけて誓い」と書かれているわけです」。これは創世記の第22章の⑩節から⑪節の部分のところで語られている言葉の引証なのです。

「わたしは自らにかけて誓う」という言い方で、アブラハムに向かって語りかけていきます。そういう、神におかれては神以上のものがないので「御自身の命にかけて、これあなたに誓います」と仰っている記事は、実は私たちの信仰からすると、おかしい記事で矛盾するのです。

というのは「誓う」というのはそもそも誓う主体が誓われる相手にとって不確かな存在であり、不真実と見える存在である時、他の者にかけて真実を保証して貰おうという意味で誓いを立てるわけです。誓いとは本来そういう意味をもっています。

だからユダヤ人たちは「私たちの主は生きておられます」という言葉を言ってそれから誓うのです。「これは神にかけて誓う」ということなのです。「私たちの主は生きておられます」と言って右手を挙げる。それが誓いの印になるわけなのですが、「自分たちは不確かだけれども、変わらないお方、真実なお方、唯一の絶対者である神が、この約束を聴いてくださり、その保証人になってくださるのですから、私のこれから言うことは、私自身は頼りにならないけれども、確かなことなのです」と表明するために「誓いということ成す」わけです。

ですから、「誓ったくせに」などと私たちは互いによく言うのですが、「誓い合うということは、土台始めからお互いを信用し合っていないということなのです。お互いに誓う者同志はそんな確かな者ではないのだ、だから神にかけて（主に責任を委ねて）この事柄を誓い、聞いていただいた主によって、正しい裁きをいただくこうではないか、というところに誓うという言葉が用いられているわけです。

教会関係ですと「誓う」ことは一般的には「結婚式の時の誓約」「夫婦の間の誓約」に

用いられます。式をする人は「あなたがたは信用できないけれども…」などとは言わないだけのことで、本来この二人がうまくゆくかどうかははっきり分からないのです。人間など本来不完全な者で、不実な者ですから。

「しかし、神はこれを成してくださり、整えてくださる御方であるがゆえに、神の憐れみによってこの家庭が祝されてゆくように御名によって祈り願いましょうと呼びかける、これが誓約によって表されることなのです」

ですから、そういう意味においては誓約をすることは非常に重大なことなのです。自分も確かでない、相手も確かでない、だからそんな不確かな同志が確かなことをこれからやろうと決心すること自体が土台無理なのですけれども、それを始めようというわけですから。しかしながら、大変な決心だとは思わないで、結婚式の誓約などする人が案外多いようですね。

他にどんな誓約が教会にあるかという、長老になると役員の誓約がある。教会学校の先生になると教師としての誓約がある。あるいは牧師を志す者は日本基督教団の場合ですと最初に准允を受けて誓約をする。その次には按手を受けて誓約をするという、神の前で「自分は皆さんに誓います」と述べるのですが、「私自身は不確かな存在ですから、神よ、あなたがどうか私自身を支えて、この誓いを果たせるように導いてください」、という祈りと願いがそこに込められながら、誓約が行われるわけです。

だから、その一番大元に在って不動不変の神は、何も誓う必要は有られないのですが、ただここでは、人間の世界に神が関わってくださって、不誠実なものが沢山あるその中で御自分の誠実を唱えていかなければならない時に「わたしは自分の命に代えてあなたを救うということ約束する」と仰しやってくくださったという意味なのです。

「『わたしは必ずあなたを祝福し、あなたの子孫を大いに増やす』と言われました」

これは、「神が絶対的な事柄としてアブラハムに告げたのです」と言っているのです。

「目に見えない、現実的でない、全くそうではない状況が<今は>そこにあったとしても、神はもう<既に>沢山の子どもをあなたに与えてくださっているのです」ということになるわけです。けれど、それが見えない、受け止められない、感じられないという現実には、正に神の言葉を無にしようとしているあらゆる力の影響から起こって来ているのだ、と言うのです。

私たちは確かにイエス・キリストの十字架の贖いによって、神からの平安を<既に>いただいているはずなのですけれども、現実には私たちには<今は>それは見えて来ないゆえに、私たちの周りには神の平安があまり感じられない。

この間、ある方と「ペルーの人質事件」についての話をしていた時に、彼が言うには、「とうとうこの問題は、解決しないままに年を越してしまいましたね」と、まあ、そうおっしゃるのです。

「司祭さんがお出でになって話をしているようですけれども、なかなかうまく話が見つからないようですね。司祭さんが中に入ったんだから、神様は心を開いて皆平和にしていれば良いのに」と、こうもおっしゃるのです。

私はその時に、「いや司祭さんが入った時にはそこに既に平和があるのです」と言ったら変な顔するのです。司祭が日曜日に公邸を訪れたのに、何の進展もなかったと日本の報道機関の全部が報道したのです。ところが実は、日曜日に司祭はミサのために行ったのです。キリストの前にミサを献げたのです。そこでは人質も人質を取った人々もなく神の前に罪人として皆膝をかがめて神に礼拝をしたのです。そしてそこには「確かに平和があった」のです。¹⁵

しかし、一般の報道機関、日本の人々の目にはそれ（神の平和）が見えないのです。その平和は、そのところに本当の意味で、彼らが疲れ果てないでいられる理由があるのだ、ということこそ神を信じない者には見ることはできないのです。

ゲリラたちは人質の扱いが大変良かったので、そんなに心身的な疲労はないようだなどという言い方をしていますが、「一週間七日の中の日だけ敵も味方もない、抑圧者も非抑圧者もないひと時がそこに訪れている、皆罪人として神の前にへりくだる時が許されているということが、強度の緊張関係をどんなに大きな平安に導くかということが伝わって来ない現実」が、やはり私たちの中にもあるのだな、とその時しみじみと感じたのです。

やはり「見せかけの平和」言い換えれば「人質が全員解放されて、彼らはもうこれからは暴れません。平和になりました」ということが多くの人たちには重大な関心事なのでしょうけれども、彼らが今、感じている国の不安定な状態とか、経済的な行き詰まりの問題とか、そんなことは、幾ら表面的に皆が仲良くしているような顔をしていても少しも解決されていないのです。

日本人は、表面的な事柄だけを眺めて時を過ごしてしまうことが大得意な民族ですから、自分たちの国が、今、大破産の危機にあることはあまり考えないで、「新年おめでとうございます」などと皆挨拶を交わしているのです。大変な時期を迎えている背景があれば、年の始まり早々に株が大暴落をする現実も起こって来たりするわけです。（1997年を振り返ると政治、経済に大きな変化があった。松山幸生先生はそれを年初に予感されていたように感じられる。）

そういう大波乱を含んだ年明けであったことを誰もがそう考えないで、「今年は私には幸せが来ますように」と初詣して皆お賽銭をあげて来たわけです。その「初詣とは何なのか」と言う「私が幸せを感じられますように」であって「本当の意味で、私を造った御方と私の関係が＜正常化＞されますように」という祈りではない。「私を愛してくださる御方の愛に＜お応え＞できますように」という祈りでもない。そういう本当に人間本位のものの考え方や、見方の中で育っている私たちには「神が約束してくださっているお約束が見えてこないことが一杯あるのです」

アブラハムも、正にここで言う「神が与えてくださった祝福」が見えて来ない状況にありました。それをこの手紙の著者は一所懸命に、またヘブライ人に語りかけるのです。その後になんと書いてあるかという「神が絶対的にお約束くださったので、こうしてアブラハムは根気よく待って、約束のものを得たのです」と。

創世記の記者は、「彼は根気よく待ったけれども、最後までその砂の数ほどになるまでは見ることはできなかった」と書いています。けれども、この手紙では、「根気よく待って、それを自分のものにしたのです」と書いています。

ということは、「ここで著者は、アブラハムに何を見ているかという<信仰>を見ているわけです。祝福の約束が具現化されなくても彼は、それは神が与えてくださったものだと思えることができたのです」

この「根気よく待って」という言葉も全く面白い言葉なのですけれども、他のところでは同じ単語を、例えばコリントの信徒への手紙Ⅰの13章「愛の章」と呼ばれているところにはこの「根気よく待つ」という言葉が「忍耐強い」とか、「愛は忍耐強い」といういい方で訳されています。あるいはヤコブの手紙の中でも「忍耐し続ける」と言うように訳されています。

だから「根気よく待つ」（マクロスーメナイ）という言葉は、私たちが気長に何かを待ち続ける、あるいは呆然と待つのではなく「それが得られない状況にあるにもかかわらず、その状況を乗り越えて働いてくださる神の介入の力を信じ続ける」ということになるわけです。これは単語の頭にマクロがついているように実際非常に大変なことなのです。ですから、私たちは割り合いに早く諦め、割り合い早く自分の立場を変身させしめることができるのですが、いや、「諦めるな」ということです。¹⁸

「宗教をされていて…」なんて言ういい方をする人がいるのですが「宗教をされていて、仏教は割り合い簡単に『諦めなさい』と言うから『ああ、そうか』と納得ができる、けれどもキリスト教は簡単に『諦めなさい』と言わない、執念深いからどうも困る」とその人は言うのです。

確かに聖書の信仰は諦めない信仰なのです。私たちが神に対して嫌だと言っても、背信の罪を犯してさえも、「あなたはわたしの愛する子」と神は言い続けられる。抵抗し、反抗し、逆らっても「わたしはお前を愛しているんだよ」と、われわれ流に言えば「可愛い子だね」と言われるのです。そんなことを言い続けられていると、自分はなんで何時までも抵抗しているのかが馬鹿らしくなってくるわけです。「何で私はいつまでも一生懸命抵抗しているのだろう、これほど言っても『あんたはいい子だね』と言われたのでは、自分の立つ瀬がないじゃないか」ということになってしまうのです。

「そこまで神は私たちを、神の御目の中には汚れたものとしてはとことん置いていらっし

やらない、イエス・キリストの十字架のゆえに、既に清められたものとして置いていてくださる。そのことがここでもう一度、私たちの中に訴えかけられる言葉として書かれていることを前にして私たちはひざまずくのです。

75歳のアブラハムがカルデアのウルを出てから25年後にイサクが生まれ、イサクが60歳の時にエサウとヤコブが生まれて、孫の顔を見たアブラハムは、丁度160歳になるわけです。そうなっても、まだ神の約束が成就していないという現実を彼は見ているわけです。神から御声をかけられる以前の生活以上に長い生活を体験しながら、神が約束してくださった御業を彼の目に見せてくださらなかった。しかし彼はその約束を固く信じ、神の御前に感謝を献げてその生涯を閉じた。そのような<信仰>がここには書かれています。19

「このように神が真実をもって、私たちに一生懸命で約束の確かさを示してくださるとされているのですよ」と書いた後で著者は次のことに進んで行っているのです。

第⑩節、⑪節

「そもそも人間は、自分より偉大なものにかけて誓うのであって、その誓いはあらゆる反対論にけりをつける保障となります。神は約束されたものを受け継ぐ人々にご自分の計画が変わらないものであることを、いっそうはっきり示したいと考え、それを誓いによって保証なされたのです」

ここでは「誓いによって与えられる保証」とはどのようなものを今度は少し角度を変えた形で説明をしています。

先程言いました「神が誓う」という矛盾のようなことを思い起こしながら、神が誓われたことは「保証してくださるのだ、必ず成就してくださるのだ」ということを、私たちに対して語りかけてくださっているのです。

⑩節には

「そもそも人間は」という一般論的な切り出しで、その次の⑪節の頭に「神は約束されたものを受け継ぐ人々に」という言葉で、アブラハムに限定して、最初語ってきたことを一般論に広げているのです。

「アブラハムの信仰を受け継いでいる人々、即ちキリスト者であるあなたがた、ということ具体的に語るのです。あなたがた一人一人に神はご計画が少しも変わっていないことをお示しになろうとして誓ったのです」とここでは説明しているわけです。20

第⑩節の前半、

「それは、目指す希望を持ち続けようとして世を逃れて来た私たちが、二つの不変な事柄によって力強く励まされるためです」

この自分たちが目指している希望、即ち、神との生きた関わりを真剣に歩んで行こうと

した時、この世から切り離され、この世の人々と足並みを揃えて生きることができなくなる、これを例えばパウロ的な表現でいえば「聖とされる」ということです。この世の者と一緒にいられなくなり、別者として選り分けられる、それが「聖とされる」という言葉で表現される。

「聖とされる」それは、もはやこの世と一つではないということなのです。そういうこの世と一緒にたにならないでこの世から離れていったあなたがた、極端な言い方をすれば、この世を捨てて来たあなたがた、この世から締め出されて来たあなたがた、でもいいと思うのです。そういうあなたがたに対して、神は「二つの変わらない事柄」これは一体何を指しているのかということ大変興味のある問題で、色々な方が「この二つの変わらない事柄」をとり上げて述べています。

私は、この二つの変わらざる事柄というのはキリストにおける私どもに与えられた究極的な贖罪の御業、永遠の命への招きの御業であって、「十字架と復活という二つの約束、二つの出来事」によって私たちが絶えず励まされ続けていることのだと思うのです。²¹

この場合「十字架」というものを持ち出すと、そこでは絶望しか感じ取ることしかできない現実が彼らの目の前には生起するのです。「受難が、迫害が」と。

しかし、「二つの変わらない事柄」の中に秘められている「永遠の約束、永遠の救いの恵みをあなたがたはそこでしっかりと受け止めなさい」。そして、目の前の現実を突き破る力、それを全く問題にしなくなってしまう力、どんなにこの世がもがいても、抵抗出来ない力をもってよみがえられた、イエスの命、その命にあなたがたが気づかずに召されていることをしっかりと示してくださろうと「神はアブラハムへの約束を、あなたがたに雛形として与えてくださったのです。」とここで言っているのです。

私たちはこの言葉を手紙を書いた著者がこんなに真剣に一所懸命に読者に訴えているということは、「これほどに言わなければならないような時代に生活していたキリスト者たちは切迫した危険状態に身をさらしていたのだ、ということを私たちは考えて見なければならぬと思います」

平和な現実の中、明日は誰にも約束され、夢見ることのできるような現実の中で、この手紙は、書かれていないのです。「明日がないかもしれないという状況の中で、なお明日に望みを置く者として生きなさいと勧めているのがヘブライ人への手紙なのだ」と言ってもいいと思います。

「この『明日』ということ、ある意味では『永遠』なのです。そして「今日」というのは、罪から贖われるという現実ですから正に『十字架』なのです」

ですから、「今日を生き、明日を生きようとする力の力を、神はアブラハムの例を通してあなたがたにもお与えくださるとお約束なさいました。正に神は、そのことのために御

命をかけてあなたがたに対する約束を成就されたのです。即ち、あなたがたの身代わりとして、御独り子の命を十字架にはりつけにすることによって救ってくださったのです」。

旧約聖書のをきちんと学んでいないと、イエスの十字架の願いというのは、これほど、くどく言われなければ伝わって来ないことが多いのです。

まあ多少は悪いことしているだろうけど、他人よりは悪いことしていないから、などというような気持ちになってしまう考えが私たちの中にはあります。ところが聖書が私たちに提示する「義」というものは100%を要求するのです。ですから、「義であるか、義でないのか」なのです。「多少は義」なんていうのはないのです。「あの人よりも義」というのもないのです。「全き義」でなければ、すべて「罪」なのです。

ですから、「私たちは全き義の者ではないのだから、全き罪人であるとしか言えない、そういう存在なのだ」ということを本当に知った時に、正に私たちは「闇⇒地獄」を見るわけです。そうすると、もう救われないという闇の中に突き落とされるような思いになる。それをイエスが「もう私たちはおしまいなのだ」という、その「おしまい」を引き受けてくださる。だから、「あなたはおしまいではなくなった、むしろ、始まりがあなたに訪れたのだ」ということが、

「あの十字架の出来事の中に秘められている、神の私たちへの深いメッセージ」であるわけです。

ところが、私たちはいつも結果論としての<おしまい>ばかり考えているのです。「どれだけ恵んで貰ったか、どれだけ沢山になったか、どれだけ多くなったかということだけが問題であって、<おしまい>はなくなって<始まり>が今訪れたのだ」という、その<始まり>に立とうとしない」のです。

ですから、そういうままで信仰していると、どこかで聖書の信仰から大きくずり落ちた信仰になってしまうという危険性が絶えずあるということなのです。

著者は手紙の中の、この僅かな箇所を割いて、この後「大祭司キリスト論」に入る前の序論として、このことをどうしても言っておかなければならなかった。「キリストなしには、あなたがたはどうしようもないのだ」ということを言わざるを得なかったのでしょう。

しかも、著者は自分自こそが危機的な状況にあって苦闘し、悩んで、苦しんで、その中で本当の信仰を持ち続けることができるだろうかと迫られていた。そんな状況の中で彼らに、「お前はそれ程罪深いのだ」とは語るができなかつたので、アブラハムと神との契約を通して、「あなたたちには自分が罪ある者のように見えないけれど、神がアブラハムに祝福を約束なさった時にもそうであったように<救い>はちゃんと用意されて、長い年月がかかるかもしれないけれども、それは神のご計画に従ってあなたたちの歴史の中に確実に進められている御業なのだ」ということを語っているのです。

こうして、この手紙の6章の⑬節から終わりの部分、即ち7章からの『祭司論に入る前の序論的な部分』では、イエス・キリストという御方と私たちとはどういう結びつきをし、どういう出会いをすることが大切なのかを「大変適切なアブラハムという存在をもって例示してくれている」と言えるのです。

第⑭節の後半、

「この事柄に関して、神は偽ることはありません」

神が何かをなされる時には、すべて御旨のままに自由に行動されるわけですから、制約、制限はないのです。

ところが、ここでは、「偽ることはありません」という制限の言葉、ある意味二重否定の言葉を使っています。神は御自由ですから何事でも否定されることはないのですが、この約束に関しては「神が命をかけられたのだから、絶対に相違することはない」という完全な保証を「ありません」という形で著者は表明せざるを得なかったのです。²⁵

「神はあらゆることがお出来になるけれども、あなたに対して与えたこの約束『私たちに祝福してくださる』という約束は、神がどう心をお変えになったとしても変わることはありません」と読んでもいいと思うのです。言い換えると、それは私たちが地上の生活の中では全く感じることのできない、捉えることのできない、絶対的な神の祝福のお約束なのだ、どんなところからでもあなたを祝福するのだ、というある意味では大変積極的な、大胆な神の御思いがここで語られていると思います。

第⑮節、

「私たちがもっているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなものであり、また至聖所の垂れ幕の内側に入っていくものなのです」

すごくわかりやすい例を引用しながら著者はここで一つの結論を言おうとしています。

「神が、何があろうと私たちを救ってくださるという御約束の確かさは、この世に私どもの力で思い通りに実現させようというのではなく、神が用意してくださっているものを受け取ることにすべてをかけ、私たちがそれを信じて歩いて行くなればその約束は既に成就しているのです、完成しているのです。しかし、それは神に私たちが近づかない限りあなたのものにはなりません」と。

私が相模原で教会を造って行こうと考えて伝道活動を始めていった時に、集まってくださった方々に二つのことを申し上げたのです。今でも私自身、彼らに誓ったことだと考えているのですけれど。

一つは「福音が福音になるためには、＜福音の出前＞を期待してはいけません」ということを言ったのです。そして、もう一つのこと

「私は、福音の出前は致しません」と言ったら、ある方は大変びっくりなさって、のちに「牧師はどんな人のところにも尋ねて行って福音を伝えるのが義務であり責任であるにもかかわらず、あの牧師は怠け者で、福音の出前はしないと断った」と言われたのです。

<出前された福音>は福音ではなくなってしまうのです。やはり神がその場でお造りになった出来たての物を食べていただかないと本物の味はわからないのです。だから求めて神に近づいて来ない限り、福音は福音ではない。確かに聖書の教えはこうですと説明には行けます、幾らでも。しかし、それがその人の福音になろうとするのだったら、「その人が、神に近づこうと思わない限り絶対に福音にはならない」のです。

「この現実の厳しさの中で、神を信じるがゆえに疎外され、にもかかわらずここに集まって来ている、逃れて来ているあなたがたこそ、神に近づこうとしているのだから、福音の受け手になるのです」とこの著者は言うわけです」²⁷

更に、「だからあなたがたの希望は、神に近づくことによって初めて果たされるものであるのだから、その希望を繋ぎ止めるために錨を神のもとに降ろしなさい」というのです。

「船の錨を降ろす」という言葉は聖書の中には二箇所ぐらいしか出て来ません。が、一般には当時の中近東、あるいは小アジア地方ではいろいろな時に使われているのです。船が大風に遭い、大嵐に遭い、大波に遭ったら錨を降ろしなさい、そのことによって船は押し流されないですみます、安定を保つことができます。あるいは、船が港に着いたならば、そこで安息を得るために先ず錨を降ろしなさいと言うのです。だから「錨を降ろす」ということは、そこに自分が留まり続ける保障になる。あるいは自分がそのことをしっかりと受け止めて自分のものにするためにそこに居続ける、そこで平安が得られる。そういうことのために、あなたがたは神のもとに錨を降ろしなさいと言います。

私たちは新しい時代に生きていますから、なるべくだったら錨など降ろさないで、何かあったらそこをすぐ退去してぱっと動けた方が良くと考える方が多いのですけれども、そうではなく「信仰とは、そんなに慌てふためいて動き回る必要はないことなので、しっかり神のもとに錨を降ろしていなさい」そういう風に先ず言うのです。

それから次には「至聖所の垂れ幕の内側に入って行く」という言い方をしていますが、この「至聖所の」という言葉は原文にはないのです。「垂れ幕の内側」とだけ書いてあるのです。神と人間とを隔てているその聖なる隔てを乗り越えてゆく、即ち「聖なる者」となる。

「大祭司」として神の前に立つ資格をもつ者が垂れ幕の中に入るのは、自分の救いのためではないのです。イスラエルの救いのために、犠牲を献げるため大祭司は年に一回至聖所に入ります。

ですから「キリスト者として生きているものは『自分の救いのためにではなく、この世界のあなたが生かされている歴史の救いのために執り成す者として神の前に立ちなさい、それがあなたの救いなのです』私たちは救われて楽をしたいとか色々な種々雑多なこと考えたくないと思いますが、そうではなく、あなたがたが救われる意味は、あなたがたが執り成す者になるということ。あなたがたを迫害する人々、あなたがたに対して厭味をいう人々、あなたがたを疎外する人々、つまり、あなたがたの負の歴史そのものの彼らを赦し

てくださるように神に執り成す、そのことによってあなたがたは平安をもたらされるのです。

イエスをキリストとして受け入れることは、私がどうこうなることではなく、そこに生きている私によって、ある意味においては関わりが与えられている社会が、家庭が、地域が、歴史が神の救いに関わることを意味しているのだ」と言ってよいと思います。

「イエスはそのために先駆者になってくださいました。今までなかったところにあなたのために道をつけてくださった、だからその道を歩きなさい。」神のところに行く道は、イエスについて行く道しかないのです。」うまい方法や速効的な方法はないのです。イエスが歩まれた道を歩むことが、正に神の救いにあずかることになるのです。

これは、当時迫害に遭ったり様々な形で抑圧を受けたりしている人々にとっては、

「イエスがお苦しみになられたあれは私たちのためだったのだ、そして私がああ苦しみを受けているのも、私がイエスについていく道なのだ」という「一つの新しい希望を彼らの中に生み出したことに違いない」と思います。

そういう意味で、私たちがもっている希望は、そう簡単に叶えられるものではなく、私たちの目から見たならば、本当に不可能に近い大きなことなのだということをもう一度しっかりと覚えておくことが大事だと思います。

第⑳節、

「イエスは、わたしたちのために先駆者としてそこへ入って行き、永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです」

神の前に執り成す最も聖なる偉大な祭司、祭司の中の祭司、王の中の王、それがメルキゼデクと言われている、ですから「イエスは永遠にそのメルキゼデクになってくださった。だからその御方の御支配の中で、愛の中で、招きの中で、今日を生き、明日を生きてみませんか」という呼びかけとなるのです。

では、イエスは大祭司になられた後は、どうなされたのか、ということは7章から後で説明され

ていくわけで、7章への橋渡しとして「永遠にメルキゼデクになられたイエス」ということをここで述べて6章の部分は終わっているのです。私はそのように考えていいのではないかと思います。

(1997年1月11日)

写者あとがき

「ヘブライ人への手紙に学ぶ」の原著では第11回目の後に、「前半のまとめ」が記されています。写者の力では「まとめ」を写すには未熟すぎることを知らされました。

又、この手紙の5章⑪節から6章⑳節までは「大祭司論」へ入る前に「耳が鈍くなっている者」への勧告としてまとまった所であると思い、「前半のまとめ」を最後の学びに延期させて頂きました。原著をまとめられた方々にご理解をお願いいたします。

私が本年6月から転入会させて頂いた日本基督教団小田原十字町教会牧師・馬場康夫先生の論文から下記の資料を引用させていただきます。

「ヘブライ人の手紙」における言葉

馬場康夫

説教塾紀要2。2000年4月15日発行

参照 以下は「ヘブライ人への手紙」と「旧約聖書」引用の対応表である。

第1章④-⑬節 (詩編第2編⑦節、サムエル記上第7章⑭節、詩編第97編⑦節、詩編104編④節、詩編第45編⑦-⑧節、詩編第102編⑳-㉔節、詩編第110編①節)、第3章⑦節-⑪節 (詩編第95編⑦-⑪節)、第3章⑮節(詩編第95編⑦節)、第4章⑦節 (詩編第95編⑦節)。第5章⑤節 (詩編第2章⑦節)、第5章⑥節(詩編第110編④節)、第7章⑰節(詩編第110編④節)、第7章㉑節 (詩編第110編) 第8章⑧-⑫節 (エレミヤ書第31章⑳-㉔節)、第10章⑤-⑦節(詩編第40編⑦-⑨節)。第10章⑳-㉔節 (イザヤ書第26章㉑節、ハバクク書第2章③-④節)など。

ヘブライ人への手紙	詩編・その他旧約聖書
<p>第1章④-⑬節</p> <p>4 御子は、天使たちより優れた者となられました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。</p> <p>5 いったい神は、かつて天使のだれに、「あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ」と言われ、更にまた、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」と言われたのでしょうか。</p> <p>6 更にまた、神はその長子をこの世界に送るとき、「神の天使たちは皆、彼を礼拝せよ」と言われました。</p> <p>7 また、天使たちに関しては、「神は、その天使たちを風とし、御自分に仕える者たちを燃える炎とする」と言われ、</p> <p>8 一方、御子に向かつては、こう言われました。「神よ、あなたの玉座は永遠に続き、また、公正の笏が御国の笏である。</p> <p>9 あなたは義を愛し、不法を憎んだ。それゆえ、神よ、あなたの神は、喜びの油を、あなたの仲間に注ぐよりも多く、あなたに注いだ。」</p> <p>10 また、こうも言われています。「主よ、あなたは初めに大地の基を据えた。もろもろの天は、あなたの手の業である。</p> <p>11 これらのものは、やがて滅びる。だが、あなたはいつまでも生きている。すべてのものは、衣のように古び廃れる。</p> <p>12 あなたが外套のように巻くと、これらのものは、衣のように変わってしまう。しかし、あなたは変わることなく、あなたの年は尽きることがない。」</p> <p>13 神は、かつて天使のだれに向かつて、「わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座っていなさい」と言われたことがあるでしょうか。</p>	<p>詩編第2章⑦節</p> <p>主の定められたところに従って私は述べよう。主は私に告げられた。「お前はわたしの子 今日わたしはお前を生んだ。」</p> <p>詩編第97章⑦節</p> <p>すべて、偶像に仕える者むなしい神々を誇りとする者は恥を受ける。神々はすべて、主に向かつてひれ伏す。</p> <p>詩編第104章④節</p> <p>さまざまな風を伝令とし燃える火を御もとに仕えさせられる。</p> <p>詩編第45章⑦節～⑧節</p> <p>7 神よ、あなたの王座は世々限りなくあなたの王権の笏は公平の笏。8 神に従うことを愛し、逆らうことを憎むあなたに神、あなたの神は油を注がれた喜びの油を、あなたに結ばれた人々の前で。</p> <p>詩編第102章㉑節～㉔節</p> <p>26 かつてあなたは大地の基を据え御手をもって天を造られました。27 それらが滅びることはあるでしょう。しかし、あなたは永らえられます。すべては衣のように朽ち果てます。着る物のようにあなたが取り替えられるとすべては替えられてしまいます。28 しかし、あなたが変わることはありません。あなたの歳月は終ることがありません。」</p> <p>詩編第110章①節</p> <p>わが主に賜った主の御言葉。「わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台としよう。」</p>

第3章⑦~⑩節

7 だから、聖霊がこう言われるとおりです。「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、

8 荒れ野で試練を受けたころ、神に反抗したときのように、心をかたくなにすることはならない。

9-10 荒れ野であなたたちの先祖はわたしを試み、験し、四十年の間わたしの業を見た。だから、わたしは、その時代の者たちに対して憤ってこう言った。『彼らはいつも心が迷っており、わたしの道を認めなかった。』

11 そのため、わたしは怒って誓った。『彼らを決してわたしの安息にあずからせはしない』と。」

第3章⑮節

15 それについては、次のように言われています。「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、神に反抗したときのように、心をかたくなにすることはならない。」

第4章⑦節

再び、神はある日を「今日」と決めて、かなりの時がたった後、既に引用したとおり、「今日、あなたたちが神の声を聞くなら、心をかたくなにすることはならない」とダビデを通して語られたのです。

第5章⑤節

5 同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子、わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた方が、それをとお与えになったのです。

6 また、神は他の個所で、「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と言われています。

第7章⑰節

17 なぜなら、「あなたこそ永遠に、メルキゼデクと同じような祭司である」と証しされているからです。

第7章⑳節

21 この方は、誓いによって祭司となられたのです。神はこの方に対してこう言われました。「主はこう誓われ、その御心を変えられることはない。『あなたこそ、永遠に祭司である。』」

第8章⑧~⑫節

8 しかし、神は彼らを責めて、こう言われました。①「『その日が来る。私はイスラエルの家、およびユダの家と②新しい契約を結ぶ』と主は言われる。

9 『それは、私が彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出した日に結んだ契約のようなものではない。彼らが私の①契約を守らなかったので私も彼らを顧みなかった』と主は言われる②。

10 『それらの日々の後私がイスラエルの家と結ぶ契約は①これである』と主は言われる。『私は、私の律法を彼らの思いに授け彼らの②心へ書き記す。私は彼らの神となり彼らは私の民となる。

11 彼らは、自分の同胞や兄弟の間で「主を知れ」と言って①教え合うことはない。小さな者から大きな者に至るまで彼らは皆、私を知るからである②。

12 私は彼らの不正を赦しもはや彼らの罪を思い起こすことはない。』」

詩編第95章⑦節~⑩節

7 主はわたしたちの神、わたしたちは主の民主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。

8 「あの日、荒れ野のメリバやマサでしたように心を頑にすることはならない。

9 あのと、あなたたちの先祖はわたしを試みた。わたしの業を見ながら、なおわたしを試した。

10 四十年の間、わたしはその世代をいとい心の迷う民と呼んだ。彼らはわたしの道を知ろうとしなかった。

11 わたしは怒り彼らをわたしの憩いの地に入れないと誓った。

詩編第95章⑦節

7 主はわたしたちの神、わたしたちは主の民主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。

詩編第2章⑦節

7 主の定められたところから従ってわたしは述べよう。主はわたしに告げられた。「お前はわたしの子今日、わたしはお前を生んだ。

詩編第110章④節

4 主は誓い、思い返されることはない。「わたしの言葉に従ってあなたとはこしえの祭司メルキゼデク（わたしの正しい王）。」

詩編第110章

エレミヤ書第31章⑳~㉔節

31 見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。

32 この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。

33 しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

34 そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

第10章⑤-⑦節

5 それで、キリストは世に来られたときに、次のように言われたのです。「あなたは、いけにえや献げ物を望まず、むしろ、わたしのために体を備えてくださいました。

6 あなたは、焼き尽くす献げ物や罪を贖うためのいけにえを好まれませんでした。

7 そこで、わたしは言いました。『御覧ください。わたしは来ました。聖書の巻物にわたしについて書いてあるとおり、神よ、御心を行うために。』」

第10章③⑦-③⑧節

37 「もう少しすると、来るべき方がおいでになる。遅れられることはない。

38 わたしの正しい者は信仰によって生きる。もしひるむようなことがあれば、その者はわたしの心に適わない。」

詩編第40章⑦-⑨節

7 あなたはいけにえも、穀物の供え物も望まず焼き尽くす供え物も罪の代償の供え物も求めずただ、わたしの耳を開いてくださいました。

8 そこでわたしは申します。御覧ください、わたしは来ております。わたしのことは巻物に記されております。

9 わたしの神よ、御旨を行うことをわたしは望みあなたの教えを胸に刻み

イザヤ第26章⑳節

20 さあ、わが民よ、部屋に入れ。戸を堅く閉ざせ。しばらくの間、隠れよ激しい憤りが過ぎ去るまで。

ハバクク第2章③④節

3 定められた時のためにもうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かって急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても、待っておれ。それは必ず来る、遅れることはない。

4 見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。」